

<p>■After</p> <p>建築名称 下段: 英語名</p>	<p>kudan house</p> <p>kudan house</p>		
<p>建築用途</p>	<p>大分類 事務所、集会施設</p>	<p>小分類</p>	
<p>改修設計者</p>	<p>株式会社竹中工務店</p>	<p><a href="#">URL</a></p>	
<p>所在地</p>	<p>東京都千代田区九段北1-15-9</p>	<p><a href="#">Google Map</a></p>	
<p>改修年</p>	<p>2018年</p>	<p>After</p>	<p>外部でも執務可能な南面庭園側テラスタ景</p>
<p>建築規模</p>	<p>鉄筋コンクリート造 地下1階、地上3階</p>		<p>撮影者提供者</p> <p>撮影:(株)セラミックワン 2018年</p>
<p>掲載書誌</p>	<p>新建築2019年3月号</p>		
<p>賞・選定</p>	<p>・日本建築学会作品選集2019 ・東京建築賞リノベ部門入賞 ・建築士会会員作品展特別賞 ・日本建築学会デザイン発表優秀賞 ・日本建築家協会優秀建築選2019優秀作品100選</p>		<p>概要 after</p> <p>相続税の課題など、個人で維持し続けることが困難な都心の歴史的建物を東急・竹中工務店・東邦レオの3社が共同でマスターリースし活用</p>
<p>資料・その他</p>	<p><a href="#">URL</a></p>		
<p>■Before</p> <p>建築名称</p>	<p>旧山口萬吉邸</p>		<p>概要 before</p> <p>内藤多仲が構造を担当し木子七郎が設計したスパニッシュスタイルの個人邸宅。壁式鉄筋コンクリート造の黎明期の建物</p>
<p>建築用途</p>	<p>大分類 住居施設</p>	<p>小分類 住宅</p>	
<p>■写真</p> <p>Before 改修前北側外観</p>	<p>After 改修前地下倉庫をギャラリーに改修</p>		<p>After 唐草模様の精細な手摺</p>
			
<p>撮影者提供者</p> <p>撮影:(株)セラミックワン 2018年</p>	<p>撮影者提供者</p> <p>撮影:(株)セラミックワン 2018年</p>		<p>撮影者提供者</p> <p>撮影: 桐原武志 2020年</p>
<p>■リノベーション内容</p>	<p>キーワード</p> <p>用途変更、対比、外観保存</p>	<p>内容</p> <p>“対比的調和”による空間の再構築・・・1927年に建設された邸宅の保存活用計画である。敷地は九段下駅からほど近い文教地区に位置し、周辺の学校や事務所の中で昭和初期の面影を色濃く残している。建築のプログラムとして、この個人住宅を会員制シェアオフィスとしてリノベーションすることが求められた。 既存の建築は構造:内藤多仲、意匠:木子七郎・今井兼次、家具:梶田恵という当時のトップアーキテクトによるスパニッシュ様式の工芸的建築であり、構造的にもRC壁構造の先駆けとなる。様式・デザイン的に価値ある本建築に対し、外装や内部空間の復原による文化的価値向上に加え、オフィス空間としての機能性、快適性を建築当初の雰囲気を残しながら如何に付加していくかが設計のテーマであった。 計画では既存建築の持つ煉瓦タイルや土壁などによる重厚な質感や、防火シャッター内蔵建具や唐草模様の鋳鉄製ラジュエターカバー等の精細なディテールが創り出す濃厚な空間を損なうことなく、事務所としての設備的性能向上を図るため、新に付加される空調機や照明、LAN、コンセント等の配管、配線を極力見えないよう工夫を重ねた。さらに、これら設備機器を覆う素材を既存に近い色調と質感を持つ鋳鉄板調大判タイルやリン酸処理した鉄材、大理石等とすることで空間との調和を図った。一方で、ディテール表現を様式的なものとは対比的にシンプルにすることで改修箇所を明確にしながら当初の建築美を継承し快適性のみを加えた”対比的調和”により歴史への創造的な解釈による空間の再構築を行うことを意図した。</p>	
<p>■備考</p>			
<p>■作成者 氏名/所属</p>	<p>佐田野剛/株式会社竹中工務店</p>		<p>管理者 記載</p>